

レビュー研究用フォーム		データ記入欄	
基本情報	対象疾患	GIST	
	タイプ	レビュー・コンセンサス	
タイトル情報	論文の英語タイトル	Diagnosis of Gastrointestinal Stromal Tumors: A Consensus Approach	
	論文の日本語タイトル	GIST の診断に関するコンセンサスアプローチ	
診療ガイドライン情報	ガイドラインでの引用有無	1.有り 2.無し ( )	
	ガイドライン上での目次名称		
書誌情報	研究デザイン	1.システマティック・レビュー 2.メタ・アナリシス 3.ランダム化比較試験 4.非ランダム化比較試験 5.コホート研究 6.症例対照研究 7.横断研究 8.症例報告 9.その他 ( )	
	Pubmed ID		
	医中誌 ID		
	雑誌名	Human Pathology	
	雑誌 ID		
	巻	33	
	号		
	ページ	459-465	
	ISSN ナンバー		
	雑誌分野	1.医学 2.歯学 3.看護 4.その他 ( )	
	原本言語	1.日本語 2.英語 3.ドイツ語 4.その他 ( )	
	発行年月	2002	
著者情報		氏名	所属機関
	筆頭著者	C.-D. M. Flethcer	Brigham and Women's Hospital
	その他著者 1	J. J. Berman	National Institutes of Health
	その他著者 2	C. Corless	Oregon Health Sciences University
	その他著者 3	F. Gorstein	Thomas Jefferson University
	その他著者 4	J. Lasota	Armed Forces Institute of Pathology
	その他著者 5	B. J. Longley	Columbia University
	その他著者 6	M. Miettinen	Armed Forces Institute of Pathology
	その他著者 7	Y. J. O'leary	Armed Forces Institute of Pathology
	その他著者 8	H. Remotti	Armed Forces Institute of Pathology
	その他著者 9	B. P. Rubin	University of Washington Medical Center
	その他著者 10	B. Shmookler	Suburban Hospital
	その他著者 11	L. H. Sobin	Armed Forces Institute of Pathology
	その他著者 12	S. W. Weiss	Emory University

レビュー研究の6項目	目的	GIST の診断の基本的考え方と転移危険性のリスク分類に関する現時点でのコンセンサスを記載する。
	データソース	引用文献. 選択基準示されず。
	研究の選択	選択基準示されず。
	データ抽出	抽出基準示されず。
	主な結果	これまで多くが平滑筋腫瘍に分類されていた腫瘍の多くが、GISTと認識されるようになった現在、GISTの診断についてのコンセンサスが必要である。GIST の診断には免疫組織化学が重要であり、CD117 (KIT)はそのほとんどで陽性となり、CD34 が60-70%, $\alpha$ -smooth muscle actin が30-40%、S100 蛋白は5%, desmin は1-2%で陽性となることを念頭において診断すべきである。腫瘍化に密接に関係している CD117 (KIT)の発現を免疫組織化学でチェックすることは、分子標的治療の観点からのみならず、GISTの診断にも重要であるが、特徴的な組織像からGISTの可能性を考えることが診断の基本であり、たとえ KIT (CD117)が陰性であっても GIST を否定してはいけない。現時点で転移の予測をすることは困難であるが、いずれの GIST も悪性のポテンシャルを持つものと考えて扱うべきである。
結論	GIST の診断には、免疫組織化学、特にCD117(KIT)の発現チェックが有用であり、分子標的治療を行うためにも欠くことのできない検査となっているが、診断の基本はその組織像である。GIST は腫瘍径と核分裂数から Very low, Low, Intermediate, High risk に分類することを提唱する。	
備考		
レビューワーコメント	レビューワー氏名	廣田誠一
	レビューワーコメント	2002年の論文ではあるが、内容は現在も GIST の診断の基本となっており、特に転移リスクの分類に関しては現在世界的に用いられており、本邦のガイドラインのなかに取り入れるべき内容と考えられる。